

水辺の魅力を活かした公民連携のかわまちづくり

社会基盤本部 防災まちづくり・地域マネジメント室 土田 香織、有田 茂、齋藤 靖史、樋 慎一郎、佐藤 英治、
国土保全事業部 水工部 西脇 翔、道路橋梁事業部 道路部 古木 伽耶、営業本部 東京営業統括部 営業部 古澤 翔吾

「熊谷市荒川かわまちづくり」計画は、令和7年8月に国土交通省のかわまちづくり支援制度に登録され、水辺の魅力を活かした公民連携による取り組みが始動しました。企画構想段階から効果的な市民参加型の検討プロセスを運営した結果、多くの市民や関係者の意見を反映した持続可能なかわまちづくり計画がまとめました。

計画登録後も、地域連携による自然体験学習会の開催等、公民連携による活動が継続的に展開されています。

※本業務は、熊谷市建設部河川課からの委託で実施しました。

はじめに

水辺は、古くから地域の歴史や文化、人々の暮らしと深く結びついてきました。「かわまちづくり」は、市町村、民間事業者、地元住民、河川管理者等が連携し、水辺の魅力を活かして地域の顔となる賑わい空間を創出する取り組みです。本稿では、熊谷市の「荒川かわまちづくり検討業務」において企画・運営した市民参加型の検討プロセスをご紹介します。

埼玉県熊谷市は、市中心部に荒川が流れ、河川や豊富な湧き水に恵まれた地域です。近世には、荒川の舟

運が経済発展を支え、交流や文化を育んできました。現在、計画地周辺には文化・スポーツ施設や桜堤などの観光資源が集積し、市のまちづくりを牽引するエリアとなっています(図1)。

検討プロセスの全体概要と特徴

「かわまちづくり」を検討するにあたり、地域ニーズや立場の違いにより、賑わい創出と住環境保全等、相反する意見が生じることが懸念されます。こうした意見を踏まえ、水辺空間で地域活動が展開し、市民の利用が充実・定着するためには、市民参加型の計画づくりが重要です。今回は、以下の特徴をもつ市民参加型のプロセスを企画・運営しました(図2、表1)。

【市民参加型プロセスの特徴】

- 大規模な関係者アセスメントによる地域の関心事の全体像の把握
⇒取組1
- 地域の関心事に応じた市民参加の場の企画・運営⇒取組2
- 参加者が意見反映を実感できるワークショップ手法の選択⇒取組2
- 地域を巻き込みながら、試行と評価の繰り返しによる継続改善のプロセス(社会実験)の実施⇒取組3



図1 計画対象エリアとゾーン区分(埼玉県熊谷市)

図2 検討フロー

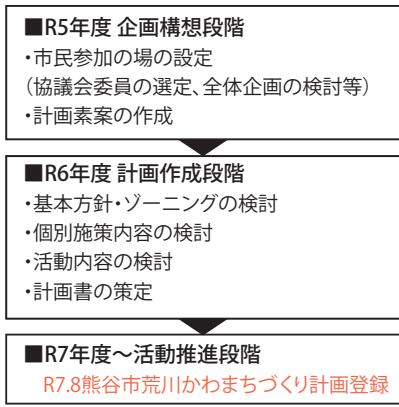


表1 適用した市民参加手法の概要

| 項目 | 概要 |
|---------------------|--|
| R5 年度 企画構想 段階 | <p>関係者アセスメント 対象: 57 人、1.5 時間/回程度、期間: R5.8～R6.3 目的: 市民意見、関心層の全体像の把握</p> <p>市民アンケート調査 回答数: 400 票、期間: R5.11.20～11.30 目的: 現状の利用状況、市民ニーズの把握</p> |
| R6 年度 計画作成 段階 | <p>かわまちづくり協議会 参加人数: 12 人(9 分野 12 組織)、全 4 回開催(R6.5～R7.3) 目的: 計画の検討・審議</p> <p>市民ワークショップ 参加人数: 総参加者 26 人(17～25 人/回)、全 3 回開催(R6.7～R6.11) 目的: 計画に対する市民意見の確認</p> |
| R7 年度～ 活動推進段階 | 【社会実験 A】地域交流イベント等の試行、R6.10 開催 参加人数: 60～70 人 |
| | 【社会実験 B】荒川自然観察会、地域連携の試行、R6.10 開催 参加人数: 20 名(児童 6 名、保護者等 7 名、その他 7 名) 目的: 問題点やニーズとの整合確認、地域連携体制づくり |

取組1 関係者アセスメント

関係者アセスメントは、中立的な第三者が主体となって関係者を雪だるま式にサンプリングし、関係者と利害・関心事(ニーズ・懸念等)の全体像を効率的に把握して、有効な市民参加の場を提案する手法です。

本手法により、キーパーソン57人から総数220の地域意見を把握しました。これをもとに地域の関心事に応じた多分野の協議会委員(学識者、自治会、商工産業、スポーツ、観光、教育、福祉・子育て、環境、市)の選出や議題設定等、市民参加の場の企画を行いました。

取組2 協議会・市民ワークショップ

市民ワークショップ(以下「市民WS」)では、市民の意見やアイデアを確認し、協議会で審議したうえで計画書に反映しました。実施にあたっては、意見反映の実感を高める効果的な手法として、グラフィックレコーディング手法※1等を組み合わせて適用しました。その結果、参加者から高い満足度を得ることができました(図3、図4、図5)。

※1グラフィックレコーディング手法：会議等における意見や情報をリアルタイムでグラフィック(図やイラスト)を用いてまとめる手法

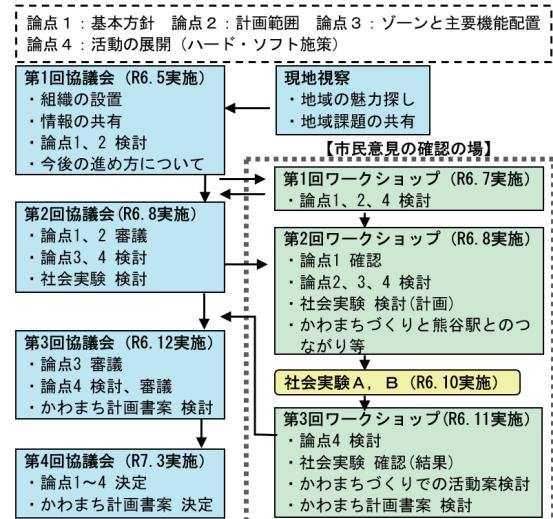


図3 協議会と市民WSによる検討フロー



図4 グラフィックレコーディング

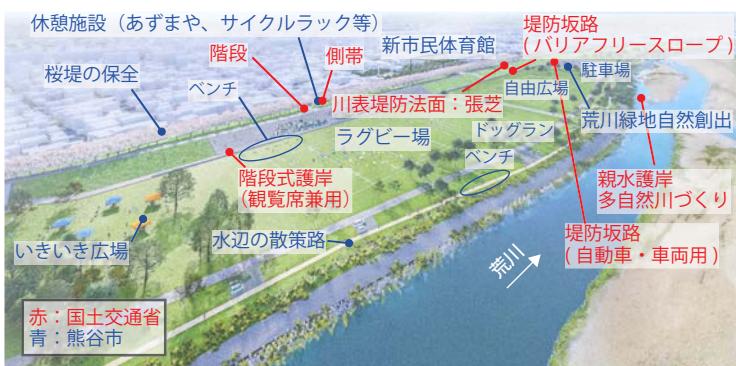


図5 計画イメージ(スマート健康文化交流センター)

取組3 社会実験

かわまちづくり計画には、河川敷地の市民利用の充実と定着を図るソフト施策も含まれています。その実現には公民連携が不可欠であり、社会実験を通じて計画内容を試行・評価することが重要です。この過程で地域団体や民間企業、住民の主体的な参加意欲を高め、相互のつながりを育みながらかわまちづくりの推進体制を構築していくことが求められます(図6)。

本検討では、河川敷を活用した地域交流イベントや自然学習会の社会実験を実施しました。これにより計画内容の地域ニーズとの整合性や課題を確認でき、地域団体との協働体制づくりにも貢献しました(写真1)。

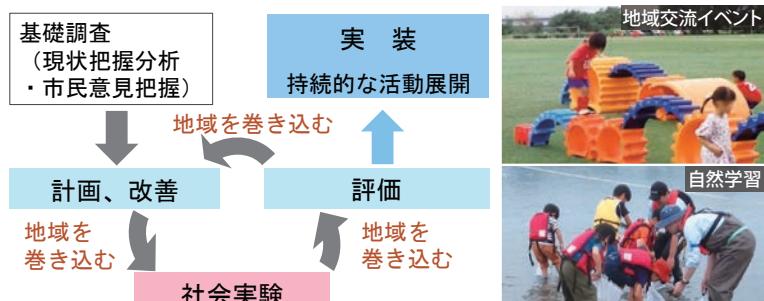


図6 社会実験を取り入れた継続改善のプロセス

あわいに

市民参加型の検討プロセスを企画・運営することで、多くの市民や関係者の意見を計画に反映し、公民連携の計画づくりに寄与しました。具体的には、まちとの連携を考慮した計画範囲の拡大、基本方針への「子ども」の視点の追加、地域と連携した取り組みの施策への反映等を実現できました。

人口減少や財政制約のなかで、公民が連携し持続可能なまちづくりを進めることが不可欠です。当社は、これまで培ってきた合意形成の技術を活用し、公民連携のまちづくりを支援してまいります。